The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中島敦後期作品研究 : 〈運命〉の表象をめぐって
Author(s)	廖, 秀娟
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44769
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	廖（リョウ）　秀（シュウ）　娟（ケン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１８０８０　号
学位授与年月日	平成 15 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**中島敦後期作品研究－〈運命〉の表象をめぐって**
論文審査委員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　後藤　昭雄　　教　授　内藤　　高

論文内容の要旨

本論文は、序章と第一章「「盈虚」論－〈他者〉との深淵に立ち竦む男」、第二章「「牛人」論－「世界のきびしい悪意」をめぐって」、第三章「「妖氛録」論－語りの揺れ」、第四章「「弟子」論－子路の成長を中心に」、第五章「「李陵」論－他者との対峙」と終章からなる。およそ 160000 字（400 字原稿用紙換算 400 枚）である。

中島敦の後期作品の研究において運命が大きな主題の一つとされてきた。それに関して、「作中人物の認識に依拠しており、それをそのまま作品のテーマに直結させる傾向」だとする。それに対して、「運命それ自体の表象ではなく、自らが迎えた結果を〈運命〉だと深く信じる作中人物に焦点をあて、作品世界全体を捉えなおす」とする。

第一章では、主人公の生涯を「因果応報的」と捉えることから解放し、他者との「思いこみやすれ違い」に焦点をあてる。従来検討されてこなかった息子の殺意についても、この観点から解明できるとする。第二章でも、息子の殺意の由来を解明し、「運命の悪意」と解釈する父親の「認識の誤謬」を指摘する。第三章では、「「世の常ならぬ」女としての夏姫像を形成しようとした」「語り手」の役割に注目する。そして、「語り手」の「価値観を作品の表面に強く打ち出し」たことが、この作品を未発表にさせたとする。第四章では、題名の変更に注目しつつ、子路と孔子の〈ズレ〉に着目し、子路の成長を明らかにすることで、新しい視点を提示しようとする。第五章では、「李陵の人生を暗転させたのは」、「運命の悪意」ではなく、「「無理」、「不可能」と認知しながら無謀な行動を取った李陵自身にあった」と解明する。李陵と司馬遷が自己像と他者の自己理解の溝に苦しむ人間存在であると把握する。

論文審査の結果の要旨

全体として、従来の研究史に対して、これまでに解明されなかった部分に注目することから、「運命の悪意」の枠から解放された読みを提出するという果敢な挑戦を行なっているといえよう。方法としても、きわめてオーソドックスな姿勢を堅持しつつ、既成の読みを更新していく姿勢である。これまで曖昧なままで検討が放置されていた箇所への着目は、当然といえば当然であるが、新たな地平を切り開こうとする斬新な印象を与えるものがある。また、留学生でありながら、日本語表現についてもほとんど破綻がなく、力強く説得力のある文章でもある。

ただ、一方で従来の「運命の悪意」を変転させることに重心を掛けすぎる側面があるために、やや一面的な裏返し

という印象を与える部分が無きにしも非ずである。また、一つひとつの読解に関しては、たとえば「妖氛録」の「語り手」の捉え方について、論者が指摘するような側面が誰をも納得させるものになっているかという点で、やや説得性に乏しいと言わざるを得ないところがある。

しかし、そうした弱点にもかかわらず、小説を小説として読むなかでの〈他者〉の問題や〈ズレ〉の指摘や語り手への新たな視線は、従来の枠を打ち破る大きな意欲と可能性を感じさせるものがある。よって、本審査委員会は本論文が博士論文（文学）にふさわしい価値をもつものと認定する。